



子猫



やだ、
ろりちゃん
そこまでやって
ないよオ!

エッヘッヘ?...
何よ、瞳美も
カワゴしたんじゃ
ないのオ?...

スカートの中
ブルマじゃないのセ?

かお...かお...



まえがき

というわけで、自爆メカの『True Love Story Summer Days, and yet...』本も3冊目となりました! いえっふー! やっぱタイトル長いよ! そりゃ次はカタカナ四文字にするわな!

で、全然関係ない話なのですが、TH2がPC版で18禁になりましたねえ...。そっか...PC移植の際に18禁化ねえ...

話は戻りましてTSSSなんですけど、PC移植しないでしようかねえ。いや別に、他意はないんですよ。でも、なんとかかねえかなあ。せめて、せめて有森先輩だけでもいいからさあ。

なんとかかねえかなあ。

ALL Illustrations&Comics
かねことしあき
MAIN Words&Editing
田野 弘高



ふんふん
ゴハン



ただいまー



あー
居ないのオ
カキ

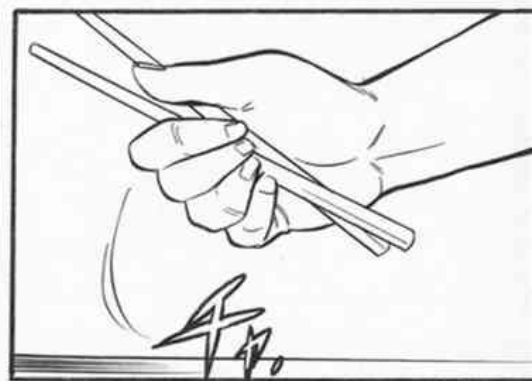


あー
お腹すいたア



あ

あ







あらモオ
参っちゃったわー

え？
向か

ただいま？



私もバツか
悪くて

昨日の事か
あるからかな
なんかツーンと
しちゃって



さっきるりせん
に会ったの
ー



向も

え！
イヤ別に！

あれから
向があったの？





カッ





離れなさいよ!!

ルリ姉!

な、な、な、
ちぎと
やめてよ!



ルリ姉
好きかも...

俺
やほり!



ラッ?



なんだよ
ルリ姉だって

だらしない
じゃんか



何それ？

其れ由が知たら
怒るよ

う…



神谷さんと居る時
だっ…：なんか
ルリ姉の事ばっかだ…

昨日だっ…
その…



…



いーよ



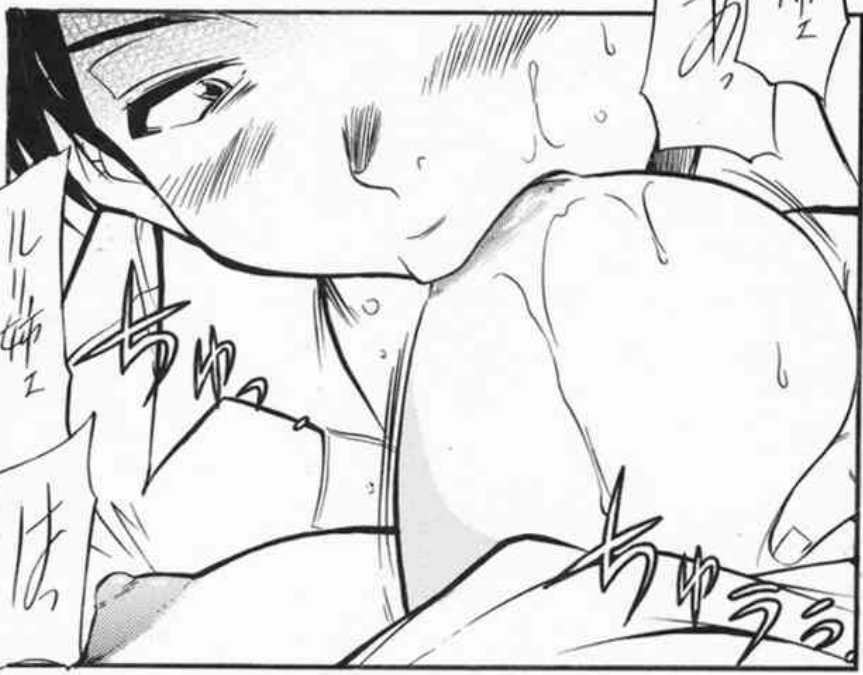
だったら
一度だけ

スッキリ
させてみる？



え？！

お互い
モヤモヤしてる
みたいだし…



ルリ姉エ
ルリ姉エ
は

ルリ姉エ
あ

あやう



ああ
ルリ姉エの
体アア

あ、たか
いよ
それ
に
や
あ
ら
か
い
や

アア

あ

くらら





ふーん



いつまで
見せよめ



判らないよ
神谷さん
しこれはするけど



じゃあ今から
このるり姉さんか

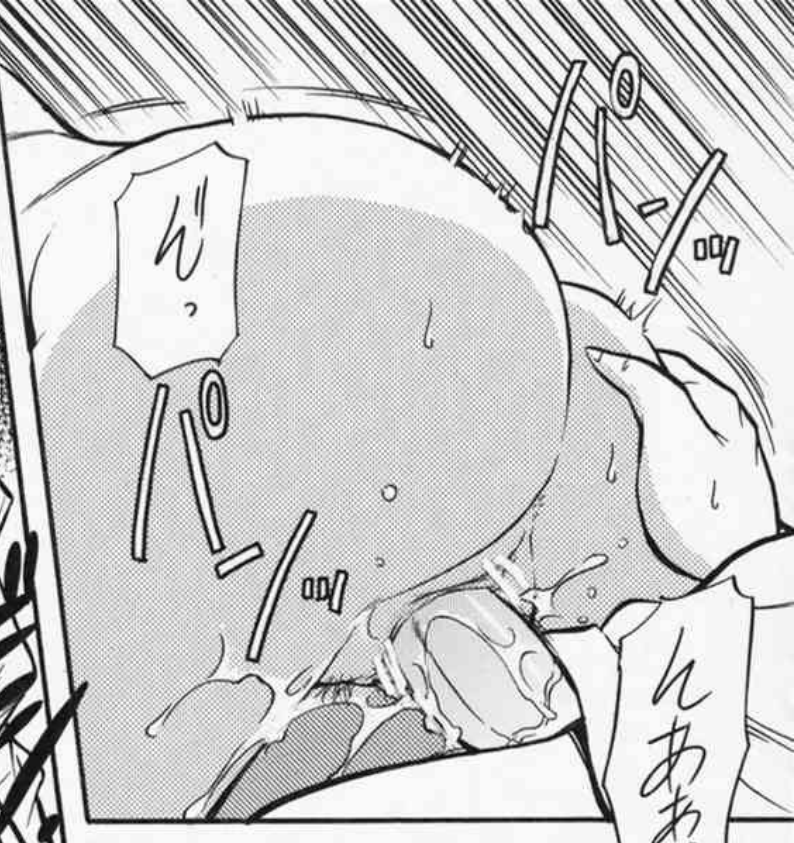
男太を
男の子にして
あげるとだ







今は許して
あげてからア



んああ



いいから
勇木ア

いいから

アア

アア



お姉ちゃんの中
でア

お姉ちゃんの中で
暴れたいア









未熟者のためのガイドダンス

「待つてよ！」

夏休み直前の学校の休み時間、背後から声を掛けられた私は階段の踊り場で振り返った。少し見上げたその先、今降りてきた階段の一番上には私を呼び止めた張本人が仁王立ちをして私を見下ろしている。

ふん。

その姿を見て私は鼻で笑ってみせた。別に何か可笑しかったわけじゃなくて、ちよつと相手を小馬鹿にしてみたかったのだ。

ついさつき私は、家族で一番大切な人よりも他人の肩を持つなどという不届き者に対して然るべき天誅を喰らわされてきたところだ。要するに、お姉さまよりも同級生の女の子の味方だ、などと言った生意気な自分の弟をボッコボコのギツギタにしたというわけで、それは実に気分の良いものだったけれども、そのいい気分も私を見下ろす二年生のせいで少し薄れてしまった。

忘れる筈も勘違いする筈もない。その弟が肩入れした相手こそ、今私に声を掛けた二年生の女子だ。

しかし彼女は自分から私に声を掛けてきたくせに、それから全く話を続けようとしなない。ただ仁王立ちをしたままでこちらを睨んだままだ。彼女のスカートが廊下の窓から流れる風でわずかになびいている。休み時間も残りわずかになり階段を通る人はなく、真正銘一対一だった。

多少は緊張しているのかと思っただけで、とんでもない。その目は獲物を確実に仕留めようとするハンターの目だった。こちらにどう噛みついてやろうかと、タイミングを伺っていると思えない。どこまでも生意気な。

私もただ、うつすらと笑って品定めをするように眺めてあげることにする。やや短めの髪、よく動きそうな表情、そして猫のような目……。パーツも、全体的なバランスもなかなか、いや、かなりの美人と言つていい。これで性格がまともなら異性は放っておかないと思うけど、たぶん普通の男ではこの子の相手はつとまらないだろう。そして美人ということだけでなく——それが余計に腹立たしいのだけれども——どういふわけだかこの子は一目見て気

にかかってしょうがない。おかげでさつきは、彼女の挑発に乗りかけてしまった。

向こうから話しかけてくるのを待とうかと思っただけで、それはそれで主導権を握られてしまうような気がしてきたので、私の方から話しかけることにした。

「名前、聞いておいてあげる。私はるり。名字は知ってるでしょう？」

「名前も知ってます。私は神谷菜由。2年E組よ」

神谷菜由：ああ、この子が、か。最近ウチの弟と一番仲良くなっている子の名前が確かにそんな名前だった。

ウチの弟も何でこんなのに、と思っただけなら今度は神谷菜由が話しかけてきた。

「どうかしていると思わないんですか。家でならまだしも、学校で弟さんにあんなことをして」

いい根性している。『どうかしている』と来た。しかも、腕を組んだ胸元を突き出して私を見下ろしている。仁王立ちと相まって、迫力十分だ。だけと言っていることはありふれているので、私も普通に答える。

「だって、せつかく姉弟で同じ学校に通っているんだもの。家に帰らなくても学校にいるうちに頼めることは頼んじやった方がお互い得じやない」

「お互いじやなくてそっちだけが得しているんじゃない。それに、頼み事のことじやなくて弟さんが自分の言うことをきかないくらいで手を出したことを言っているのよ」

「手を出した？ ああ、あんなのいつものことよ。まあ、今日は生意気言っただからついやりすぎちゃったかもしれないけど」

「当たり前のごとくのように言ってるけど、相手の立場が弱いことを見越しての暴力なんて卑怯だわ。姉弟ゲンカにすらなっていないじやない」

「そうよ、ケンカじやないわ。これは我が家でのきちんとした躰なのよ。その結果、普段は言うことをきく弟に育ったんだもの、そんなに間違った躰じやなかったと思うわ」

「躰ですって？ あなたの勝手な解釈を押しつけないでよ！ いつまでも子供じやないのよ！」

組んでいた腕を振りほどき、私を指差して神谷菜由が言う。「あら、私と弟はいつまでも姉と弟よ。年齢に関係なくね。これまでも、こ

れからもね」

階上から威嚇する神谷菜由の気合いに飲まれないよう、私は出来るだけ平静を装い答える。

でも、なぜだろう。神谷菜由はたいしたことを言っているわけではないに、いちいち私の心にひっつかかる。

彼女が自分の弟と仲良くしているから？ ううん、べつにそんなことはどうでもいい。どちらかというと、いい年して仲の良い女の子の友達の一人や二人や七人くらいはいないと私の弟じゃないって思うもの。

じゃあ、私に対して生意気なことを言うから？ まあ、それはそれで腹が立たないわけじゃないけれど、それだったら言っている内容が単純な割にこんなに私の心に引っ掛かるとは思えない。

それなら、私たち姉弟の関係に干渉してくるから？ ——それは、何を言われても私は心を揺るがされない自信があった。私たちは二人きりの『姉弟』

なんだから、別にこれでいいのだ。良くも悪くも、これは絶対的。姉弟だから許されることもあるし、姉弟だから許されないこともある。でも私たちに『姉弟でも許されないこと』は存在しないのだから。

けれども。

「でも、さつきも言ったでしょ？ そういう風に思っているのはあなただけじゃないんですか？」

神谷菜由が、ここぞとばかりに胸を張って言う。

「弟さんが私の味方だと言ったらずいぶん怒ってましたけど、余程認めたくない事実だったんですね。自分の言いなりになるとばかり思ってたのにつて。でも、彼だつて人の言いなりになつてばかりじゃないんだから！ お姉さんだからつて、何だつて彼が許してくれると思つたら大間違いよ！ いくつか痛い目に遭えばいいんだわ！」

『言つてやつた！』神谷菜由がそんな感じの表情で頬を紅潮させている。だけど私は神谷菜由のその瞳に、言つてしまったことに対しての不安が漂っているのを見逃さなかった。

「ふ、言うじゃない。さつきも聞いたけど、あんたあいつにホレてんの？」

「さつきも言つたけど、そんなの関係ないじゃない」

再び、神谷菜由が腕を組んだ胸元を張つて私を見下ろす。けれども神谷菜由の心の底が見えてしまった私は、見下ろされて縮こまつたままにいるつも

りなど全くなかった。

「なら、こつちの答えも同じね。私があいつに何をしようと思つたら関係ないじゃない」

「人として黙つていられないのよ。姉という立場を利用して有無を言わず自分のわがままを通すなんて、見ていられないわ」

「人として？ 何言つてんのよ！ そんな見え透いたこと言つて格好つけても、結局自分がホレた男がシスコンだと思つているから不安で仕方がないんでしょ！ それで私に噛みついてくるつてわけね！」

「な、何ですつて！ 誰があんなシスコンのことなんか好きなものですか！」私の反撃に、神谷菜由の顔が真っ赤になった。たぶん、私の顔も似たようなものだろう。

「ふん、やつぱりシスコンだつて思つてんじゃないの。でもね、教えてあげるわ。あいつはシスコンなんかじゃないのよ。確かに私のことは好きだけど、それはどこの姉弟の間にもある家族愛と同じものよ。ただ、あいつは今まで本気で女の子のことを好きになつたことがなかつたし、うちには女の家族が私しかいないから普通の異性との恋愛感情と家族愛との差をよくわかつていないだけよ」

そう言いながら、私は今までいた踊り場から階段を上り、神谷菜由がいる三階に行く。

「なつ、えつ：」

「あら、少し安心した？ まあ、それはつまり、まだあなたへの気持ちと異性への恋愛感情だつて思つてないことだからね」

「だ、だから私は！」

「もう一つ教えてあげる。私はたとえ姉じゃなくてもあいつに対して好きなように振る舞うわよ。いいえ、あいつに対してだけじゃなく、あらゆることに對してね」

「そ、そんなわがママが許されるとでも思つてるの!？」

私の言葉に対する神谷菜由の反応は当然のものだったけど、私はそのまま続ける。

「そうね、それをわがママと呼ぶ人もいるかもね。けど、自由と呼ぶ人もいるわよ。私は自分のことだから、自分の好きな呼び方を選ばせてもらうわ。だから『自由』つてね。もちろん、こういう『自由』をすべての人が受け入

れてくれる訳じゃないわよ。でも、あいつは受け入れてくれてるの。何故なら私があいつの姉で、あいつは私の弟だからよ。だから私は姉として自分の弟に好き勝手やっていいの。他にも理由はそれぞれあるけどこういう私を受け入れてくれる人は結構いるものなのよ」

「けど、人付き合いつてそういうものじゃないんじゃないの？ 相手の気持ちを考えて、相手に合わせるのが正しいんじゃないの？」

「そうよ、だから、相手の人が私の気持ちを考えて、私に合わせるの。私だつて相手のこと全然考えない訳じゃないから、相手にも私のこと考えてもらつていいじゃない」

「そ、そんなこと……」

「あ、いたいた。るりちゃん！」

私の言葉に神谷菜由が言葉を失っていると、今度は階下から私に掛けてくる声があった。

「そろそろ授業始まるけど、どうする？ 次の時間、教室移動で視聴覚室よ」友人の瞳美が休み時間が終わろうとして戻つてこない私を探しに来てくれたらしい。

「ああ、上手く誤魔化しといてー。瞳美の言葉だったら先生も信じるでしょ」

「うん、わかつたわ。るりちゃんの教科書も持つていくから、どうぞこゆつくり」

「サンキュー。お礼は精神的にねー」

私の適当なお願いを快諾してくれた瞳美を見送ると、神谷菜由が驚きながら尋ねてくる。

「い、今の有森さんですよ。お友達なんですか」

「んー、まあね」

「だつて、有森さんつて……」

「ああ、瞳美のことを特別なイメージで捉えている人多いみたいだけどね。私、そういうの好きじゃないから。だから普通に友達になれたし、そういう私だから彼女も私の『自由』を理解して付き合つてくれるんじゃないの？」

「こんなのよくある話よ。あなたは、そういう友達いないの？」

「……多くは、ないわ」

初めて、自信なさげに神谷菜由が答えた。

「私、相手の気持ちがわからなくて、怒らせちゃうことがよくあるから……」

「多くなくてもいいわよ。でも、その少ない相手は大事に、そして本気で付き合わないかね。変に気を遣つて自分のやりたことを我慢して付き合つても全然意味無いもの」

神谷菜由と同じ階に行き、同じ目の高さで落ち着いて話すようになって完全にわかつた。何故、この子を初めて見た時から気になつて仕方がなかつたのか、何故、この子の言うことがいちいち気になつて無視できなかったのか。この子は、私とよく似ているんだ。外見も、内面も、そしておそらく、うちの弟との関係も。

ただ、さっきの不安な瞳に表れていたように、彼女はまだ自分に自信が持てていないのだ。私はそんな自分に似た未熟な存在である彼女にイライラして、彼女が気になつて仕方がないのだろう。うわ、私、二年生の子に対して『未熟』とか思つてる。やだなー。

でもまあ、そうと解れば導いてあげてもいいだろう。彼女のためにも、他ならぬかわいい弟のためにも。

「ウチの弟だつたら、あなたの『自由』にも付き合つてくれるんじゃないの？」

「駄目よ。この前、すごく怒らせちゃつたもの。確かに、私のわがままは私らしくて……嫌いじゃないつて言つてくれたけど、でも、やつぱりすごく迷惑だつて。それでもきちんと謝つて仲直りできたから、それ以来あんまりわがまま言わないようにしてきたのに、るりさんがさつきあんなことしているから、ずるいなつて思つて、それで……」

ああ、そつか。さっきの『言つてやつたわ！』つて顔をしたら時に隠しきれなかつた不安な様子は、そんなことがあつたからなのか。

「なるほどね、じゃあ、またこれからも好きにしたら？」

「だつて、私……お姉さんでもなんでもないし……」

「いいの、姉である私が許すから。あいつのこと好きにしなさいよ」

「そ、そんな、いくらなんでも……」

「あいつ、私のわがままには私が姉だから付き合つてくれてるけど、でも今日は私よりもあなたの肩を持ったじゃない。それだけでも十分なんじゃないの？ それに一度ケンカしてから仲直りしてるんでしょ？ だつたら大丈夫よ。大体、あいつは……まあ、それはそのうちわかるか。とにかく、私はあなたにいくら言われても好きにするから、あなたも好きにするといいわよ。だつて、そうしないと人生もつたないじゃない。自分に正直でいた方がいい

いわよ」

「自分に正直……」

その言葉を聞いたとたん、今までの戸惑いを帯びた神谷菜由の表情は一変し、これまで見たこともないような自信に満ちた笑顔になった。

「ま、それもそうよね。るりさん、いいこと言うわねー」

けろり、そんな音がするよう感じだった。でもきつと、これが本来の神谷菜由なのだろう。だって、私がこうなのだから。

「私のわがままには周りの人が泣いてもらわなきゃいけない、って思ってたんだけど、別に泣く人ばかりとは限らないのよね。そして彼だったら、私のわがままに泣かないでついてきてくれるって期待してもいいのかしら？」

「あ、平気平気。私の弟だし、もうあなたの友だちになったんでしょ？ 素質あるわよ」

「あはははは、何の素質よ」

けらけら笑う神谷菜由だったけど、これは本当にわかってなさそうだった。まあ、そこまではまだ教えてあげることもないだろう。

「まあ、それは追々わかるわよ。あ、それとね、ちよつと気になってたんだけどあなた少しメイク変えた方がいいわよ」

「え？ そ、そうですか？」

「なんか演劇みたいなメイクで、ちよつとキツめののよね。私たちがみたいな顔はね……」

結局、私たちはそれからずっと話してしまつて授業には出ないままだった。

この翌日、私と神谷菜由がさんざんやり合った階段のすぐ近くの廊下で、今度はうちの弟と神谷菜由が話していた。彼女は私と話し終わった時と同じように実に生き生きとしていたが、うちの弟はすっかり元気を取り戻した彼女に圧倒されっぱなしで、まったくされるがままだった。

「るりさんに言われたの。自分に正直にいた方がいいってね」

「え……」

「だから、やりたいことはやるのっ！」

「やりたいことって……」

「そういうことだから、よろしくうー」

まったく誠意のこもっていないお願いの言葉を残して去っていく神谷菜由

を呆然と見送る自分の弟を見ていると、可笑しくって仕方がなかった。そっかー、傍から見ているこんなんだっただ、私たちは。大人しくしようと頑張っていた神谷菜由が私に噛みついてきたのも、無理はないかも知れない。でも……

「さつそくやられてるわね」

「ルリ姉っ！ たたく、余計なことを言いやがって……」

神谷菜由を煽った張本人である私が出てきたので、弟はすかさず抗議をしてきた。

「あんたのために言ったのよ」

「だって、わたしは非難される筋合いはない。だって、本当にあんたのため」

「な、なんで僕のためなんだよ？」

「だって、この方がうれしいでしょ？」

「えっ！ ど、どういう意味だよ？」

「そのままの意味よ」

「へ？」

「じゃあね」

「あつ、ルリ姉っ！」

神谷菜由も、そして私の大事な弟自身も、弟の『素質』にはまた気付いていないようだった。まったく、二人とも未熟なんだから。かわいいたらありやしない。

私は自分でもわかるくらいニヤけてしまっている顔を、人に見られないように上に向けながら廊下を進んで教室に戻っていった。

てなわけで、またー。

あと、かねこは最近『ミミックメガストア』でも仕事はじめました。報告だけ。

次の本は、どういっわけだか世間様(といっても実に狭い「世間」ですが)で前人気が高い『キミキス』を予定しています。つても、この文を書いている時点でも正式な発売日はまだ発表になつてないのですが、やっぱり夏「ミ」の申込期間には間に合わなかつたかー。未発売のゲームつてサークルの当落選考が厳しいから勘弁して欲しかつたなあ。ああ、早く『キミキス』やりたいよう。そして隠しキャラが坂本真綾でありますように。隠しキャラのエンディングだけ坂本真綾の歌でありますように。今思ひこ『MissingBlue』で凄く「んや」してたな...

あしがさ

他の人の描く
@やっぱり
ま姉ちゃんモノの
エロマンガは
ええねん
かえ



誌名：子猫ソビエト
発行：自爆メカ
発行日：2005.12.30
印刷：トク出版

HomePage
<http://ggg.headstore.net/>

E-mail address
sgu02413@nifty.com



おしまい.

白
爆
X
方

